

魔法少女ドゥルポン☆マギカ

魔法少女すぎや☆マギカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女と魔女がしのぎを削り、群雄割拠する町——見滝原。

その町にはいつからか、こんな「うわさ」がまことしやかにささやかれている。

「魔女よりも恐ろしい力を持つ生命体がいる……と」

その生物の名前は、すべてを破壊し守護するものとして、敬慕の念を込め、こう呼ばれた。

一ードウルポンナーと。

「N
o 1 : キュベ
え と
ドウルポン」
目 次

「N O 1 : キュウベえ と ドゥルポン」

ここは、発展と輝きの町「見滝原」。

高層ビルが立ち並び、多くの店が軒を連ねる商店街に彼はいた。時は秋。晴天の日の下で彼——「きゅうべえ」は伸びをして、街へ向かつて歩きだした。

彼の仕事は、少女を魔法少女へと変え、魔法少女が魔女へと姿を変える際に生じる希望と絶望の相転移によつて発生するエネルギーを、宇宙の平和のために集めることである。

今日も彼は、いつもと同じように時によろこばれ、時にさげすまれ、少女を魔法少女へと変えていく・・はずだつた。

だがこの日、たまたまこの町に長期旅行に来ていたたつた一人の人間、否、人間であるかすらも怪しい一つの生命体によつて彼の一日は無茶苦茶なものとなることになる。

その恐ろしさは、感情を持たないはずの彼に恐怖を与えるほどのものがつた——。

「N O 1 : キュウベえ と ドゥルポン」

その不思議に最初に気づいたのは、きゅうべえの方だつた。

何気なく歩いていた町の中で、彼は不思議なものを見にしたのだ。それは、一人の人だつた。

ものすごい猫背でフードを深々とかぶり、寒くなつてきた秋であるのに薄いジャージをはいている。

その足取りはふらふらよろよろ、どこか危なつかしい。少なくとも、その後姿を彼は一人の人だと思つた。姿だけは——。

彼の仕事は、人の生に眠る因果律を見て、素質のあるものに契約を持ち掛けるというものなのだが、この時、彼がその人に感じた因果律は、「計り知れなかつた」。

言葉に表すと簡単な表現になつてしまつが、彼の今までの人生（キュウ生？）の中で、そんな人物に出会つたことはなかつた。

彼の契約が人類がこの地球に誕生してからだといえれば、その恐ろし

さがわかるだろうか。

そう。

人類の誕生以来の発見なのだ。

これに彼が感じた感情は、「歓喜」であつた。

もしもあの人を魔法少女（男なので魔法少年かもしけないが）にすれば、いつたいどれほどのエネルギーが得られるのだろうか、このいつまで続くか分からぬ契約の輪廻を終わらせることがでできるのではないかと考えたのだ。

ここで一つ断つておきたいのは、彼が歓喜したのは手間が省けることにあり、人類を犠牲にしなくてよくなつたことに喚起したことではないということだ。

しかしながら、すぐにそんな彼の考えは甘かつたと知ることになる。

彼は、その男に向かつて歩みを進め、声が聞こえる程度に近づき、声をかけた。

「君」

その時だつた。

彼の体がはじけ飛んだのだ。

あらゆることを想定していた彼に、想定外のことが起こつたのだ。

その焦りは、すさまじいものだつた。

「いやいやいやいやいや！え？は！？」

彼は思わず、そう叫んでいた。

叫ばずにいられなかつた。

そして男は、声の聞こえた方をきよろきよろして、何もいないとわかるとそのまま歩いて、街のほうへと消えていった。

その顔に彼は恐怖を感じ、後を追おうなどとは考えなかつた。否、考えれなかつた。

開いているかわからぬほどの細い目に、不気味にひび割れた唇、そして、その唇から流れ落ちている血液に。

そして、この個体は二度と出会いたくないと思うほどの恐怖を覚え

たのだから。

このことを、彼はのちに仲間にこう語つたという。

「あの町には、どんな魔女よりも恐ろしい生物がいるのだ・・と」